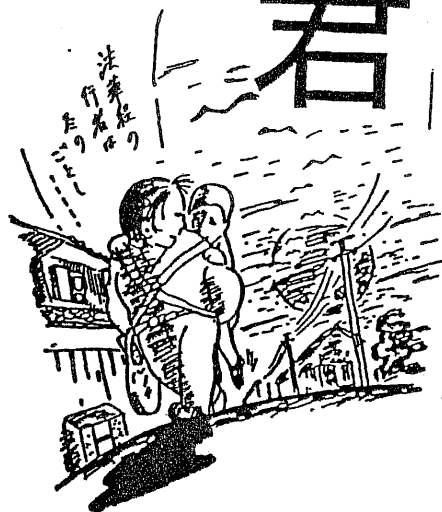


冬は必ず春となる

おさむ君

実録物語



正妙寺蔵

この物語は、法露寺時報
第二百号から十二回にわた
って連載されたものです。

文章・森田忠夫
挿絵・雄野伸一

澄み切った秋空に、クッキリと浮かんだ六甲の山、その峰から吹きよせる風は、道行く人々の頬をやさしくなで、心を和ませる。それに背を向ける一人の女性がいた。病気の我が子、おさむを思うと、マサノの心は自然に暗くなる。

(一)

数年前に受けた大きなショックは、マサノの胸に深く刻み込まれていた。そして今、その時の声が鮮やかに脳裏に浮びあがっていた。

六歳の時、いままで元気でね回っていた修に突然病魔が襲った。全身マヒの難病だ。マサノは修を背負って気が狂ったように病院をたずね歩いてきた。

と宗教を求め歩き、様々な神仏の信仰をしてきた。その結果、良くなるどころかいよいよ病状は悪化した。今は霊友会に入会している。そして今日は知人に誘われ、日蓮正宗の座談会へ新来者として来ていた。

兵庫県芦屋市にある堅持院の講頭宅である。

「生まれた時はどうでしたか」と若い僧形の青年がたずねた。

「六歳まで元気でした……」

マサノは力のない声で返事をした。

その若い僧はマサノの眼をのぞきこみながら、「絶対に治ります」

と大きな声で断定的に言った。そして、

「この信心を三年やってみなさい。絶対治るから」と言う。

聞けばその若い僧は住職だという。住職は今ま

た。何人もの医者に見てもらった。

「お願いします。どうかこの子を！」

両手を合わせ、必死に哀願するマサノに、心臓をえぐる様な答えだけが返ってくるのだった。

「無理ですね、うちでは手におえませんよ」

「お気の毒ですが、今の医学では治す方法が」

「んー奥さん、せめて最後は畳の上で死なせてあげたら」

(もしかしたら……)と、かすかに抱いた希望の光も、まるで高波にのまれた小舟が、あっけなく深い海の底に沈んで行くように、マサノに残されたものは絶望——そして計り知れない大きな悲しみだけだった。

マサノは「もうこの子はダメ……」と諦めていた。(三人もの医学博士が見放した)突然訪れた不幸な運命の前に、人間たちがいかに無力であるかを思い知った。そして、ワラをもつかむ思いで転々

での体験からそう言い切ったのだ。が、後にそれが大きな壁となって立ちはだかり、また、大歓喜となって返ってくるのだが……

確信溢れる住職の語に(ひょっとして本当に……いや、今度も同じ)と今までぐらついていた心によくやくケリがつき(……もう一度頑張ってみよう。治らなくてもいい。せめて死んだ時くらい、まともな姿でお棺に納めてあげたい)と、マサノの母親としての切なる思いが入信を決意させていた。その日から彼女の闘いの日々が始まった。御講、折伏、座談会、御書講義、全ての会合へと出かけて行った(修の為にやるしかないんだ)

(二)

「チュン、チュン……」

電線に止ったスズメが、しきりに修を呼んだ。彼はその声で目を覚まし、両眼をこすりながら、

うつろにまぶたを開いた。

ゆるやかに漂う無数の塵が、窓からさしこむ西日に、キラキラ光って見えた。修は何も考えずに寝床から、ただじっと見ているのが好きだった。

父は仕事、弟達は学校、母も仕事に出かけて行っている。一人残された修は、凍りつくような孤独感にさいなまれる。

気の遠くなる程の長い一日を、もう何日、いや何年過ごしただろう。(今日は天気が良いから庭へ出てみよう)寝床からすり抜けると、イモ虫の様に身をくねらせ、やっとの思いで縁側へ出た。

修は、なぜ自分がこんな姿になってしまったのか、さっぱり解らなかった。肺結核、脊髄カリエス等、六つの病氣をかかえ、足がひつついたまま伸びない。ズボンを履くと脱がす事もできない。ハサミで切って着替えをするにも一日がかり、以前は元気に遊んだり、喧嘩したり、楽しかった。

講頭さんだ。そしてもう一人は……

「ハイ、そうです」

修は目の前に立っている人物が、秋山先生である事を、その風貌から直感していた。

「母さんに聞いたんだけど、僕、歩けるようになるかなあ」

修は上目づかいに住職の目をのぞきこんだ。

「あーなれるとも」

(これじゃ無理だよ、なんて言えやしない)

「本当？」

「本当に決まっているさ」

「どうして？」

「だって修君には御本尊様があるもの」

「でも……」

「でも、何かな」

「僕、まだ歩けないよ」

と、子供特有の素朴な質問に、住職は少々面食ら

(また走れるようになるだろうか) そんな思いも半ば無くなっていたに違いない……。

六歳で病氣にかかり、既に十歳、もう四年の歳月が流れていた。

「こんにちは」

「……」

返事がない、チャイムを押しても何の反応もない(留守かな)と思い、庭へ廻って遭遇した光景に、住職は自分の目を疑った。(うそだろう……)手にゲタを履いて動いている。足はくっついたまま伸びない(シマッタ)これではいくら御本尊でも、この子は治せない……。

この時が、修と住職の初めての出会いであった。驚きのあまり、言葉が止まった。

「き、君……修君かい」

振り向くとそこに二人の男が立っていた。一人は

っていた。

「御本尊様はね、すごいんだぞ、折りとして叶わざるなし！一生懸命お題目を唱えてごらん」

御本尊様のことになる、つい熱が入ってしまった、相手は子供だと言うのに(しょうもない男だ、俺も)自分で自分がおかしかった。

「病氣が治る様に一生懸命お題目を唱えて頑張れよ！先生も修君の為に御折念しているからね」とほえんだ。

それは修の胸につかえた鉛色の暗雲を吹き飛ばし、希望を与えるに充分な、魅力ある笑顔だった。

(一一一)

四月二十八日、立宗会だ。支部の、二十四時間折伏闘争日でもあった。

その日もマサノは、知人の家へと方々折伏に歩いたが、結果は、みじめでつらい思いをしただけ

で、足は自然に堅持院へ向かっていった。

マサノは、肩を落としてつぶやいた。

「先生、折伏できません」

「そんな簡単にできるものか」

住職の口調はいつになく厳しい。

「それで相手は何と言っているんだ」

「そんなにありがたい宗教なら、あんたの家の病人（修）を治してから来い、その子が治ったら入信してやるよ……行く先々でそう言われて……」

ここで同情してはダメ。住職は言った。

「なぜ言わないんだ。私はこの子を治すために折伏しているのです。信心を勧めています。それによってこの子は絶対に治るって、なぜ言わない。明日からは、修を背負って折伏に行きなさい」

と、厳しく叱りつけた。

（すこしは優しい事言ってくれるかと思ったのに。



これが尊敬し、慕っている秋山先生の言葉か）

唇をぐっとかみしめると、マサノはすつくと立ち上がり、本堂を出て行った。

「もう一度やり直し！」

次の朝、修を背負って折伏に出かけた。

きのう歩いたこの道、生涯忘れる事はないだろう。

「南無妙法蓮華経……」

自然にお題目が出てきた。

（母さんが絶対治してやるよ！また歩けるようになるうね）

心の中でそうつぶやき立ち止まった。

そして大きく深く深呼吸、右手がゆっくり伸びて行き、「エイ！」気合もろともチャイムを押した。

修は思った……。

「僕の病気を治そうと、かあさんは毎日毎日お題目を唱えている、先生も、講頭さんも、地区の皆もだ。僕だって一日二千遍のお題目で頑張っている。今日も、知合の人達に『信心すると僕の病気が治る』と言って折伏に廻っている。

それにしても腹が立つのは、どうやらかあさんの悪口を皆が言っている。それも、僕が原因みたいだ。くそ！蹴飛ばしてやる！」

……心の中で叫んだ。しかし、その足は意に反してピクリとも動こうとしなかった。

修を背負っての帰り道、次から次へと様々な思い出が浮かび胸をしめつけた。

（お前が生まれた時、とうさん、かあさんは、どんなに喜んだことか。とうさんは仕事をほっぽりだして病院まで飛んできてね。まだ、セメントのついた手でお前を抱き上げて「よかった！よかった！ありがとう。ありがとう」って何度

も何度も…あんなに喜ぶとうさんの顔、見たことなかった。かあさん嬉しかった……」

涙が出て止まらなかった。口からでるのはお題目しかなかった。ふっと御書の一節が頭の隅をよぎった。

『法華經を信じる者は冬の如し、冬は必ず春となる』

(修は必ず治る)

茜色に染る芦屋の町、落ちてゆくくだいだいの色の太陽は一段と加速度を増し、重なりあった二人の影は、また長くなった。

(四) 座談△△

「ああ、疲れた、もう止めよう」

雨の為、遅れを取り戻そうと義弟の飯田の手助けを得て、遅くまで頑張る次郎であった。

「今日は帰りに、家に寄って一杯やっていけ」

「(免よ)」

玄関を開くと笑い声。拍手と多数の人が集まっているらしい声が聞こえて来る。座談会は最高のムードだ。玄関の呼び声に一人の婦人が出て来た。(誰かしら)と思う間もなく、その男はづかづかと上がりこんで来た。

ねじり鉢巻きの異様な珍入者に雰囲気は一変した。三十数名のその座にいる人々は一斉に注目。

「アラ山崎さんの御主人。ようこそ」

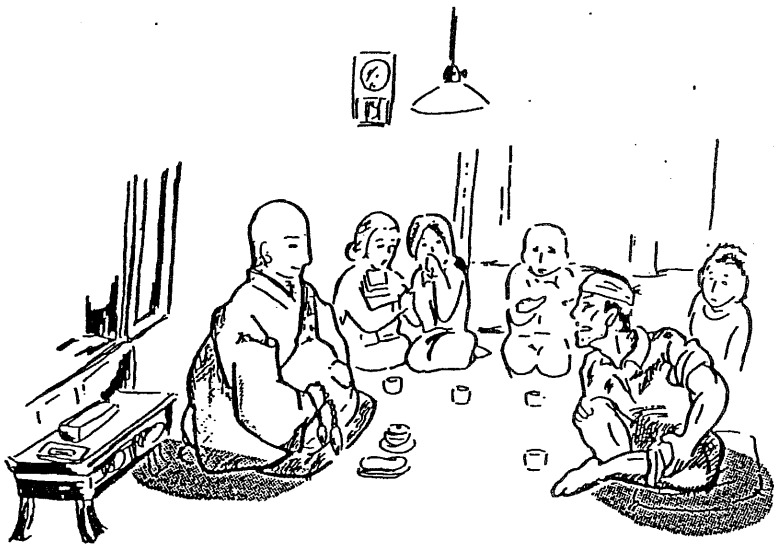
と会場の一人婦人が云うと皆笑顔になり、拍手で歓迎の意を表わした。

ニコニコ顔で拍手で迎えられ、中には妻のマサノに向かって、

「奥さん良かったネ。御主人が来てくれて……」

それを聞いた人の良い次郎は、照れ隠しに肩をいからし、住職の座っているテーブルの前に、

「ゴメンヨ、ゴメンヨ」



義弟を連れ帰ってきたものの、家には幼い不具の修だけしかいなかった。(女房の奴はまた座談会とかに行っているのだな、毎日毎日、座談会、折伏と良く続くもんだ)腹が立つが気を静め、

「オーイ上がれよ」

と台所から一升ビンと湯呑み二個を持って来てテーブルの前にどっかとあぐらをかいた。

なみなみと注いだコップ酒を一気に呑み干して、

「おい、お前もやれ」

義弟にすすめる。一升ビンが空になった。

「オイ酒！」

と云って女房の留守に気がついた。(畜生、今日は絶対カンペンならん)コップをテーブルに叩きつけた次郎は、ねじり鉢巻きを締めなおした。

「お前も来い！」

地区長の家で行なわれている座談会場へ向かった。

と人をかき分けてドッキリあぐらをかいた。

「お前が修の言う先生か?」

一座の人達はとうなることかと固唾をのんで見守っている。妻のマサノは恥ずかしそうに隅の方で下を向いている。

「山崎さんの奥さん、よかったですね。御主人が座談会に来てくれて」

との住職の一声に拍手がわいた。

「おい!先生よ。俺は文句をつけに来たんやさかいな。お前か、修の足が治るから信心しろと言っただましているのは!」

会場は一変し、先程の笑い声は消え、皆住職と次郎の方に注目した。

「山崎さん、修君の足は元の様になるよ!元気に歩けるようになる!それが此の御本尊様です。日蓮正宗ですよ。ここにいる人を御覧なさい。みんな初めは今のあなたの様に反対し、文句を

言い、疑っていたのですが、今では皆歓喜に燃えているでしょう。楽しそうでしょう。山崎さんも一緒にやりましょう!」

次郎を知っている婦人が言った。

「これを機会にやりましょうよ」

と合槌を打った。

お人好しで飲んべエの次郎は困ってしまった。

(父親の俺より慕っている秋山先生の言うことだ。

悪いことはない。俺も。イヤイヤ女房、そして皆の手前、ここは一つカッコウつけなくては)と次郎は凄んで見せた。

「ナニ!俺に信心しろと。冗談じゃないぜ。あの修の足が治せるか!」

「山崎さん、修君の為に信心するんだ!あなたがすれば修君は歩けるようになる!絶対になる!」急に住職の声が大きくなった。ビックリした次郎、ここで負けたら男がすたる。

「笑わせるなよ。幾人もの博士の先生方が見捨て

て帰された子だぜ。それを坊主のあんたが治す?

面白い。やって貰おうじゃないか!見事歩けるようになったら俺は芦屋の街中を隅から隅まで逆立ちして歩こうじゃないか!おい先生、俺の信心はそれからや!」

「山崎さん、カッコウつけている時ではないでしょう。奥さんも修君も、そしてここにいる人も皆一生懸命、修君の為に御題目を唱えているんですよ。父親のあなたが信心するのが一番の早道ですよ。ネエ山崎さん、勇気を出して共にやりましょう」

さすがの次郎も住職に心を見抜かれては仕方がない。

「山崎さんどうです」

の言葉に、無言で鉢巻きをはずして無難作に顔をぬぐった。

時を見ていたかの如く、マサノは、

「先生すみません。皆様すみません」

と米つきバツタのように、何度も何度も頭を下げ、

「お父ちゃん、今日は帰りましたよ」

次郎の腕を引っ張ると外に出た。

(五) 波紋

「本当に治るかね。私、先日山崎さんの家で修ちゃん見たけど、いくら御本尊様でもあれは無理じゃない」

四地区での座談会での話である。

「いや、秋山先生は絶対的な自信を持っておっしゃってたよ、『治る!、いや皆で御書を立証するんだ』と」

それはどんな御書かとの問いに対し、班長は

「『妙法五字の光明に照らされて、本有の尊形と

なる」と、修君は、六歳の時病氣になったんだ
そうだ。それまでは元気な子であつたらしい。
そして先生は「私の信心を修君にかける、絶対
元の姿にして見せる。否、御本尊様にして戴く、
これが堅持院法華講の大きな発展につながるの
だから、私は命をかける」とね」

山崎次郎の投げかけた一件は各地区に大きな波
紋となつて広がつた。

「先生の応援をしよう！」

「私の地区は折伏で！」

「私の地区は唱題会をしよう！」

「秋山先生に恥をかかすな！」

「山崎さんに逆立ちさせよう！」

「通日、先生は『修君のことで皆さんも唱題して
下さっているのは結構だけど、それより折伏し
てくれ。折伏の援護射撃が一番だ』とおっしゃ
つたから、うちの地区では折伏だ！」

（修は絶対に治る）自分自身に言い聞かせる様に
……。そして低いが力強い声で、

「寂滅無情は今日のうつつなるべし、只南無妙法
蓮華經とだに唱え奉らば滅せぬ罪やあるべき。
来たらぬ福や有るべき甚深なり、是れを信受す
べし」

と、御書の一節を口ずさんでいた。

（上ハ） 動揺

「修君がだいぶ良くなったそうぞ！」

住職の一念心の折りと、全支部員の願いは不思
議と修の身体に少しづつではあるが、変化を与え
ていった。

修も子供ながらに、毎日二千遍の唱題を忘れず
励んだ。（よくなつたぞー）それは修自身が一番
良く知っていることだ。修は益々唱題に精を出し
た。

かくして、先生が山崎次郎を折伏して修の難病
平癒の御折念は第五地区から全地区、そして支部
全体に広がり堅持院が住職の秋山先生を中心に、
「師弟相對」、真の異体同心となり唱題・折伏は
進んだ。

「御苦勞様、今日の折伏成果は一人か、矢張り新
来者を連れて来ないと駄目だね。では明日十一
時の時に御授戒をしよう」

と、時計を見ると十一時。（今日も遅くなった。

でも入信者が一人できた）

「有難うございました」

皆の声に送られて自転車ペダルを踏んだ。フト、
修のことが頭をかすめた。

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經……」

唱題せずにはいられなかった。住職は唯一心に題
目を唱えながら一時間の夜道を寺へと向つた。

驚いたのは呑んべえの父、次郎。

「そんな馬鹿なことが……」

しかし、よく見ると良い方向に向かっている事は
確かだ。修の動きに変化が出始めた。その時フト
秋山先生の顔が浮かんだ。

（俺の負けかな、でも歩けるわけではなし、逆立
ちはせんぞ）

と、しかし、親としてお人好しの次郎は心で叫ん
だ。

（先生、逆立ちしてもええさかい、修を歩けるよ
うにしてなあー）

「山崎さん、良かったね。修ちゃん大分よくなつ
たってネ」

「山崎さん、一緒に信心しよう。頑張ろうよ！」
今では他の地区の人達まで来るようになり、自分
の事のように喜んでくれる。

（変わった信者やなあー。近所のもんは修を馬鹿

にするのに、法華講の人達は修の事を自分のことのように喜んでくれる」

「山崎さん。修君の病には父親であるあなたの信心が一番大切なんだ。必要なんだよ。修が可愛くないのか」

秋山先生はこの言葉が、修が良くなっていけばゆく程胸につかえて離れない。

（南無妙法蓮華経か、俺も修の為にやって見るか）
心の中でナムミョウホウレンゲキョウ、ナムミョウホウレンゲキョウと二度ばかり唱えてみた。今度は小さな声を出して唱えてみた。（ちょっと照れ臭いな……）

横で壁ゴテを動かしている義弟（座談会に連れて行った男）の飯田が言った。

「兄貴、何んか言うたかあー」

次郎は少女の様に顔を赤らめた。あれだけ反対していた御題目を聞かれたかと思った。

い次郎であった。

「そうや、どうもあの坊さん気に掛かる。自信に満ちていた。俺もタンカを切った手前、後に引けずハツタリかましたが、そう言えば修、この頃、気のせいか調子よさそうや、そう思はへんか」

（七） 義弟の心

義弟が腕組みをしながら、

「ヒョットしたら兄貴、こりゃあ街中逆立ちせんとあかんと違うのか」とからかった。

「馬鹿たれ、俺は坊主のことなんか眼中にないワ」と言っただけのもの、この頃何をしていても秋山先生の事が頭から離れない。

義弟と別れて家に着いたが誰もいない。マサノは晩飯の買い物に行ったのだらう。修は手にお数

「いや、何でもない、今日は早よう終わりそうや。帰りに俺の家へ寄って一杯やって行けや」

照れ隠しにそう言いながらコテを動かした。

義弟の飯田に道具箱を持たせての帰り道、酒屋の前に通りかかった時、

「兄貴、今日はちょっと用事があるさかい、まっすぐ帰りまっさ」

「そうか、じゃあ、そこでちょっと一杯やっていくか、付き合え」

と立ち飲みだ。

なみなみとついでコップ酒を一気に飲み干した次郎「もう一杯」と注文し、隣の飯田に話しかけた。

「この前（座談会）はすまなんだなあー」

「なんや、あの芦屋の座談会の事かいな」

コップを片手に飯田は興味なさそうに言った。

あれ以来、信心の事が心にひっかかって離れない

珠を掛けたまま御本尊様の前でうつ伏せになって寝ている。（子供やなあ）静かに歩み寄って次郎は自分のハンテンを脱いで修にかけてやった。

初めて御本尊様の前に行った次郎。

（これが御本尊というものか）

日増しに元気になる修を自分自身もよく知っている。（ありがとう。修をよろしく願います）

心の中でつぶやくと、次郎はそっと周囲の様子を見、一人御本尊に向かって小声で、

「ナムミョウホーレンゲキョウ」

と唱えてみた。玄関の方を見るとマサノはまだ帰っていない。部屋の障子も全部閉めた。（マサノに見つかるこみっともない）

御本尊の前に座った。手を合わせた次郎は小さな声で、

「ナムミョウホーレンゲキョウ」

と唱え始めた。一分、三分、初めは小さい声であ

ったが（不思議だ。元気が出て来た。これが生命
力か）

だんだん力が入り、大きな声になっていた。修
の頭が動いた。ハッと我に返った次郎は唱題を止
めた。

「なんやお父ちゃん、帰ってたんか。今日は早か
ったんやネ。お父ちゃん御本尊さん拜んでくれ
たん？…ありがとう」

笑顔で問い掛ける修に、

「アホなこと言うな。俺がなんでそんなことせん
ならん」

心を見抜かれた次郎は、

「御本尊さんの所へ来たんは、お前が風邪でも引
いたらいかん思うて、着物を掛けに来ただけや」
と言いながら、買物から帰って台所に立ってい
るマサノに向かって、

「信心はお前とお母ちゃんのする事でワシには関

心の中では一番住職を慕って頼りにしている次郎
である。

数日前からお寺の工事をやっていた次郎。今日
は最後の仕上げだ。

「じゃあ山崎さん、一杯御馳走するか」
と、住職は奥さんに用意をさせた。

「本当にお世話になりましたネ山崎さん。お陰で
助かりましたわ」

と言いながら酒を勧めた。飲むほどに、酔うほど
に次郎は御機嫌になっていった。

「それじゃ山崎さん。工事代です。どうも有難う
と住職が渡した。

「へエーこれはこれはどうもすみまへん。有難う
ございます」

押し戴いたまではよかったが、手許がおぼつかぬ。
腹巻きに入れようとしてポトリ…。見かねた奥さ

係あらへん」

と言いながら（御本尊さん、素直になれないワシ
を許して下さい。意地もあるし照れくさいもんで）
と心でお詫びをしながら茶の間にあぐらをかいた。

「山崎さん、おめでとう。御授戒受けたんやって
ね」

「おめでとう、おめでとう」

会う人ごとに「おめでとう」と言われ、この頃の
次郎はちょっとした人気者になって、照れっぱな
しである。

左官の腕は超一流。酒さえ吞まなければ間違ひ
ないのだが、好きなものは止められない。一本氣
で曲がったことは大嫌い。見掛けよりは純な職人
根性なのだろう。

酒が入ると「オイ、先生、修の足は何時治るん
や」と悪態をつき、周りの者をハラハラさせるが、

ん、ポケットにつっ込んでやったら、なんと底が
破れてしまってストントン。

「こりゃあー山崎さん仕方がないわネ」

と奥さん。ポケットに入れたお金のぐるりを縫い
付けてしまった。これを見た住職、

「こりゃ良い。これこそ本当の衣裏宝珠だ。アハ
ハハハハ」

「これで大丈夫。山崎さん。ここにお金入れて
ありますよ」

と耳元で叫ぶように言った。

「奥さんに電話した方がいんじゃないか」

住職はヨレヨレになった次郎の顔をのぞきこんだ。

「大丈夫、大丈夫…」

「本当に大丈夫か、随分呑んだぞ」

「ヘッヘッ、この位で飲んだなんて言えまっか」
と、かなり危なっかしい足取りでヨタヨタと立ち
上がった。

「山崎さん、本当に大丈夫？ 氣を付けてネ。ここにお金入れてあるのわかってる？ 帰ったら一番に奥さんに渡しなさいヨ」

奥さんも心配そうに襦を開けながら手をかしてやった。

「ヒヤー、今晚は先生、すっかり御馳走になってしもうて、ほんまにすんまへんでした。ああ奥さんここで結構だす。ヘイ、ヘイ」

玄關の方へ行きかけ、

「オット題目題目。題目三唱忘れたらあかん、あかん」

と本堂へ上がった。

次郎が帰って一時間位たって、

「リリ……」

電話のベルが鳴った。

誰だ今頃。

「ハイハイ堅持院です」

なのは言うまでもない。

「何んだ。格好いい事言って、寝てしまってるじゃないか」

二人は顔を見合わせて「フー」と溜め息をついた。

(八)

こうして月日は流れ、又折伏闘争日がやって来た。四月立宗会折伏の月がやって来た。四月は一ヶ月大折伏闘争だ。特に四月二十八日は二十四時間折伏闘争だ。秋山先生の命令が出された。

「当日は私も全地区の拠点を廻るよ」

この言葉に各地区は燃えた。

この時に、次郎の信心も本物に鍛えねば、それには「折伏」と「確信」以外にはない。

このままでは駄目だ。いくら頑張っただけでも父親があれでは……。子供の事で親が苦しむのも因縁だ。親子揃って真剣にやらねば宿業は断ち切れ

「……………」

と住職は受話器を耳にしたまま眉間にシワを寄せ何やら考え込んでいる。

「どうしたんです、誰から？」

「山崎の奥さんがね、山崎さんがまだ帰って来ないって」

「えー、あれからもう随分経ちますよ」

暫く考えて、

「オイ、ひょっとして」

「アッひょっとしますよ」

二人は急いで本堂に駆け上がった。うなずき合ながら戸を開けた。

「グアー、グアー、グオー……」

真っ暗な誰もいないはずの本堂に豪快にイビキが鳴り響いている。皆の心配を尻目に次郎は気持ち良さそうに悠然と大の字になって寝ていた。御題目の代わりにイビキを唱えたのは、次郎が初めて

ない。(今日は腹を据えてかからねば)

住職は次郎の前に、

「修が可愛いだろう。お前の信心にかかっているのだぞ、マサノさんを見てみる、あんなに一生懸命やっているのに、子供の病氣は両親の因縁だ、車の両方の輪のように父母一つになってやらにゃ駄目なんだ、お前の信心一つで修の足が伸びたり縮んだりするだろう。この時に修に賭けるんだ！ 絶対に折伏して来い！」

と、強く叱りつけた。

家に帰ると次郎は思った。

「あんなに怒らんでも、やる時にはやるわい」

一杯飲みながら今までの事を思い起こしていた。

(座談会へ乗り込んだ事。初めて御題目を唱えてみた事。秋山先生、奥さん、地区の人達、マサノの苦勞、そして修の足は……)

「お前の信心に掛かっているぞ、この時に賭ける

んだー」

住職の聲が何度も駆け巡った。(俺は秋山先生に会うと、一週間か十日位は信心する気になってやるが、すぐ駄目になる)……「とき考え込むと、一気に湯呑みの酒を飲み干して「ポン」と膝を叩いて立ち上がった。

そこはマサノがお世話になっている社長宅である。次郎はそこへ折伏の応援にかけつけた。

「又信心の話か、もういいよ、山崎さんは信心の話さえしなけりゃいい人なんだが」

もううんざりと言った感じで全然話を聞こうとしない。それでも続けようとするマサノに、

「私は信心なんて関係ないよ、それより自分の頭の上の蠅でも追ったらどうかね」

「そんなんじゃないんです」

あんまり教学はないが、気が付くと住職が言った

通りの話が無意識に言葉となって出ていた。理に詰まった社長はカッとなった。

「そう、それじゃあんなの子供が歩ける様になったら、その時は信心しよう、無理だと思うけど……」

さっきからジーンと我慢して聴いていた次郎は、その言葉にカチンと来た。そして口から思いもしないセリフが出ていた。

「歩けるやないでっかー修は、歩けまっせ！」

酒の勢いもあったのだろう、大変な事を言ってしまった。(チョット、あんな) マサノはそう言ったつもりだが、声にならなかった。

「それじゃ明日見に行くよ」

社長はフンと鼻で笑った。マサノは哑然として言葉もなかった。

社長宅を出ると二人は事の重大さを改めて認識した。



「あんたは何ちゅうこと云うのよ、余計なこと云うて！」

「文句云うてもしょうがないやろ、腹が立って、腹が立って！」

「こうなったら先生に相談するしか無いわ」

サアー大変だ！とにかく明日社長が来る！

そう思うと居ても立ってもいられない。二人は泡を食って帰宅する羽目になった。

(九) 唱題

自宅に着いた次郎は、事の成り行きを住職に告げた。

「なに、お前、又、何でそんな……」

「先生、すんまへん、つい、カーッとなってもて」

「んー、今更しょうがないよ、やって見るしかないだろう」

「はあ、本当にすんまへん」

「御題目しかない、私も御折念するから」

電話を切ると、住職は又すぐに受話器を取って

ダイヤルを廻し、講頭に連絡をとった。

「はい、松島です。あつ、先生……何ですって！

しかし、まだ修は……立てませんよ……」

と最後は言葉にならなかった。

「そうなんだ、しかし、やるだけやろうじゃない

か！」

（今夜は寝ずに唱題だ）奥様も後について本堂に向った。

もはや避けて通れぬ、勝負の時がやって来た事を住職は感じずにはいられなかった。

その夜、修は大変だった。御本尊様の前に寝かされ、

「修、あした、社長が来るからな、絶対に立てよ、

立たんとあかんぞ！」

熱いタオルで湿布して強引にひっぱられる。修は必死で題目を唱え我慢した。

「アー！お父ちゃん、痛いよオー」

修は生きた心地がしなかった。

「おー、ごめんよ、ちよいと力が入りすぎたわい」次郎は修の足を優しくさすると又、題目を唱えながら熱いタオルを足に巻き引っ張った。

修は思った……

（そうか、あの時の社長だ。お母ちゃんに背負われ、折伏に行った。そして、とっても悔しい思いをしたんだ。帰り道でお母ちゃんは泣いていたなあ、声は聞こへなかったけど、その息づかいが僕の胸にちゃんと伝って来たんや。今度は絶対に許せん！……けど、この足が言うことさかへんし……）

「お父ちゃん、僕、立てるやろか？」

「何を弱気なこと言うか！わしの子やったら、立て！絶対に立てよ、お前があした立てなんだら、皆、ガツカリするぞ、先生かて……」

「先生……」

修は初めて住職と出会った時の事を思い出していた。

（僕、治るかなあー）

（あー絶対に治るとも）

そして、約束したんや、治るって約束を。僕は先生を信じているんや！

「お父ちゃん、僕、絶対に立つ、立ってみせるからな！先生の為に、お父ちゃんの為に」

「よし、その意気や！」

と、つい又、力が入り過ぎて、

「いた、痛いよっ」

と又、修は声を上げた。

その横でマサノは必死にお題目を唱えている。



(折りとして叶わざるなしの御本尊ならば立たせて下さい)

命懸けのお題目だった。もう何回、線香に火をつけたか覚えてはいなかった。

ヒューッ、と空を切る風の音は、時折低いうなり声となり、咆哮となって窓ガラスを叩いた。その風の声も、夜明けが近づくにつれて次第におとなしくなり、次郎とマサノの唱題の声だけが、まだ明けやらぬあたりの大気を奮わせて行った。

タッタタッタ、と地面を駆ける少年の足音が近づき、ガチャン、と郵便受けに新聞が入れられた。山の裂け目から太陽は、恥ずかしそうに顔をのぞかせ、軒先からしたたる朝露がキラリと光った。あ、運命の夜は明けた……。

修はスヤスヤと低い寝息をたてている。

(御本尊様にあとはおまかせして、十時に社長を

な朝早くから……。

コッコッ、革靴の底が道の小石を叩き、それが次郎の家に近づいて来る。歩きながら社長は迷っていた。

「御本尊様か……」

冷静に考えてみれば、マサノの言う通りかも知れない。しかし、ここまで自分の力でやって来た、という確信も捨てきれない。が、それよりも一番彼の心を動かしたのは、何と云ってもマサノの熱心さと、ひたむきな信心の姿に(そんなに言うなら入信してもいいな)という心を起こさせていた。

遂にその時がやって来た。お題目をあげながら、修は四つん這いになり、両足にグッと力を入れた。膝が震えた、立てない。

「修君、ガンバッテ！」

迎えるだけだ)

次郎夫婦の唱題のみが静かに聞こえていた。

(十一) 兎先、心

いつもなら、ねじり鉢巻きで「行ってくるぞ」と勢いよく玄関を飛び出し、仕事に出かける次郎だが、今日ばかりは、そんな気分にはなれない。

時計が五時を告げた。妻のマサノと一緒に修を背負ってお寺へ朝参り。

帰ってくるなり又、御本尊様の前に座った。夕べちょっとウトウトとしてマサノにつつかれ、ハッとした覚えはあるが、考えてみると一睡もしていなかった。今度ばかりは命懸けで唱題した次郎だった。

「山崎さん、おはよう」

今日の目を心配して同志は次から次と上がり込んで来る。まるで地区の唱題会の様だ。それもこん

横から声援が飛んだ。修は壁にもたれかかると両手で体を支えた。心臓は張り裂けそうだし、油汗は全身を包み、氣力を吸い取って行く。

(苦しい!) 氣が遠くなりそうだ。みんなが唱えてくれているお題目の声も遠ざかり、苦痛のみが頭をかすめる。

「修君、ガンバッテ！」

「ガンバレ! ガンバレ!」

と手を叩いて応援している地区の人たち。拳をにぎりしめ声援を送る青年部。歯をくいしばって、まるで自分が立ち上がるような姿をして見せる人。祈るようにジッと見守る女子部。皆、修の足の一点に目はそがれている。

隣の部屋では、真剣に御本尊様に向かって、次郎夫婦を中心に地区の人たちが唱題を重ねている。修はもう心身共に疲れきって、目の前が真っ暗になっていき、周囲の人たちの唱題の声すら小さ



ありがとう先生！
御本尊様！
僕立だよ

るんや！
そこには、壁に寄り掛かって膝をガクガクさせて、修が立っていた。
「修君が立った！」
「おさむが立った！」
苦痛をこらえて子供ながらに笑顔を見せている。
(秋山先生、ボク、立ったぜ！立ったんや！ガン バッタヤロ……)
「修君がほんまに立った……」
期せずして拍手が沸き起こった。皆の目に涙が光る。嗚咽する者……次郎の目から大粒の涙があふれ出た。
一人静かに御本尊様に向かいマサノは唱題していた。

くなっていき、人々の顔もぼんやりとして来た。

(僕はもうあかん) 修は皆の期待を裏切り、バツタリ倒れた。もうろうとしてしている頭に、

「修君、ガンバッテ！」

の声。その時、秋山先生の顔が頭に浮かんだ。

(日蓮が弟子等は獅子王の子となりて群狐に笑はるる事なかれ！修、ガンバルのだ！)

ハッと我にかえった修は、

「ハイ！」

と返事をし、全身に力をこめた。

(先生、僕は絶対に立つ！絶対に立つんや！)

しかし、心と裏腹に修はそのまま眠りについていた。

(……) 山崎次郎さんの家は……

一応表札を確認した彼は、

「御免ください」

と声をかけ静かに玄関の戸を開けた。中から聞こえてくる唱題の声がピタリと止んだ。中にいる地区の人たちの視線がいつせいに彼に注がれた。

「アッ、社長さんだ！」

そして皆の目は障子越しの修に向けられていた。

彼は笑いながら言った。

「山崎さん、心配をかけたネ。皆さんも……もう

いいよ、入信することにしたから」

「エエッ！また、なんですすか、あんなに反対してはったのに……」

「それはマア……何んと言おうか、奥さんをはじめ、

あなた達の信心の熱心さに負けたんだらうネ。もう修君が立とうが立つまいが、そんな事はど

うでもいいんです。私も皆さんの仲間入りをさせて下さい。修君が立てなくてもいいんですよ」

その時、隣の部屋から声がして障子が開いた。

「社長のオッチャン！見て！僕立てるんや！立て

(十一) 法華經は道理

「やったね次郎さんーおめでとう」

「折りとして叶わざるなしの御金言通りだね」

と地区の人たちは抱き合い、飛び上がって喜んだ。しかし、それも一瞬、修の立ったのはそれっきりだった。……もう数ヵ月も前の事である。

「先生、どうなったんだすやろ、なんで又もとへ戻ってしもうたんでっか」

次郎は住職に喰ってかかったのを思い出していた。ガククリ肩を落とした次郎夫婦に、住職は、

「結局まだ宿業は断ち切れてなかったんだと思うよ、強引に立たせたけど、それは間違っていたんじゃないかと思う。無理な折りはね」宿業という言葉がマサノには、はがゆくてならなかった。

病氣を治そうと必死になって来た色んな宗教、

……

「山崎さん、これなら治りますよ」

「エッー、なんでっか」

「いや、治るんですよ、これなら」

「ほんまですか？」

「本当です。私の知っている尼崎市の病院でね、それもリハビリだけです」

医者之余りにも簡単に言い切った。しかも無表情に……。

今まで三人の医者に見放され、どうせなら家で死なせてあげなさいとまで言われたのに、それが今、絶対治ると太鼓判を押された。

(夢やない、本当の事なんや)

一ときしてようやく実感が湧いて来た。と同時に胸は高鳴り、頭がボーッとして来た。

「山崎さん、どうしたんです、入院するなら紹介状書きますよ」

それが薬にならずかえって毒になっていた事を思うと、何ともやりきれない気持ちだった。

真っ暗闇の中を、一筋の光だけを頼りにここまでやって来た。御本尊様を信じ、住職を信じて、長いトンネルをやっと抜けたと思ったら、又そこはトンネルの中……。

「以前の修を見てみなさい、わかるでしょ、もう一息じゃないですか」

住職は次郎夫婦を励ました。

今思えば、六つもの病氣をかかえ、歩けるかどうか、それよりも死ぬか生きるかの状態だった。それが今こんなに元気になった。一度きりとは言え立ち上がったのも事実、(よし、又出直し)と発心したのがもう数ヵ月も前のことだった。何度発心を重ねたことだろう……。

そんなある日のこと、一人の医者が修を診て言

「医者、私の声に我に返った次郎は思わず手を合わせ、
「御本尊様ありがとうございます、南無妙法蓮華經、……………」

とお礼のお題目をあげていた。そして一刻も早くこの夢のような朗報を秋山先生に知らせなあと電話ボックスへ急いだ。

「リリリン、……………」

「ハイ、堅持院です……誰が、それで何だって」

「先生、わしです、山崎です……という訳で」
次郎は住職に医者の話を聞かせた。

「よかった、よかったじゃないですか、山崎さん」
とはずんだ声が返ってきた。

「修どないするか？」

次郎は尋ねた。

「いやア」

「今度こそ入院した方がえーのところがうか」

とマサノは入院をすすめた。

「ボクは尼崎なんか行かへんで」

と入院をかたくなに拒んだ。

「なんで嫌なんや」

「なんで言うても、病院には御本尊様がないやんか」

これには次郎もマサノも返事の仕様がなかった。

「秋山先生が入院せよと言うならしてもええけど、僕は先生の言う通りにするねん」

二人は住職に相談することになった。

(十一) 山崎班長燃えんる

その病院は丁度修と同じ様な子供達が入院している尼崎市立病院である。

「ベットでお題目あげたらええから入院しなさいて言われたよ」

「先生がそう言うんやったら僕入院する」



と、あっさりと修は決めてしまった。

「どないしとるかなあ…」

修が入院して一週間目次郎は病院へ見舞いに来た。胸に大きな紙袋を抱えている。(あいつ、喜ぶやろな、こんな高級品やたら食べられへんで、台湾バナナやで)と考えながら廊下を通り修の病室に向かう。

近づくにつれ妙な声をするのに気づいた。「おやっ」と首をかしげた、(これは……やっぱりそうだ)

病室を確認してドアを開けて見ると驚いた。

「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、………」

澄んだ声で子供五、六人のお題目の大合唱だ。

「日蓮一人始めは南無妙法蓮華経と唱えしが、二人三人百人と次第に唱え伝ふるなり、未来もまた然るべし」

の御金言はここにも生きていた。

「あんたら、何でお題目あげてるのや」

子供等の声がピタリと止み、

「お題目あげたらな、おさむ君の様に早くなおるんや」

と口を揃える。

「そうか、そうか、おおきに、あんた等もしっかり頑張りや、バナナあげよ、みんなで食べてや」
「お父ちゃん、僕が歩けるようになったら何買うてくれる？」

「ああ、何でも買うたるぜ」

「何でも？」

「はあ、何でもや」

「ほんならトランジスタラジオ、なあ、ほんまにやで」

「よっしゃ、よっしゃ」

と約束して次郎は病室をあとにした。

廊下を行くと一人の貴婦人が声を掛けてきた。

「お宅が山崎さんですか」

「はあ、へえ山崎だす」

「うちの子に愛なこと教えんといて下さいよ、南無妙法蓮華経だか、お題目だか知らんけど」

とキッときつい目でにらまれた。

「どうもすみまへん、気をつけます」

と頭を下げて病院を出て来たが、次郎はさっきの婦人のことを思い出し、だんだん怒りが込み上げて来た。

（俺は堅持院第五地区の班長やで、昔の俺とは違うんや、何で題目があかんか！）

電車にゆられながら、今度おうたら絶対折伏してやるんやーと、決意の炎がメラメラと燃え上がった。

「ほな行ってくるぞ」

独り言を言いながら駅の階段を上ると改札口を出た。（さっきの夢何やったかな、いい夢見てたのにビックリして忘れてしまったわ）

駅を出ると次郎は、修が入院している尼崎市立病院へと向った。

あれからちょうど一週間、修の様子を見に、お見舞いにやってきた。

「ヒャー、けっこう濡れてしもったわ」

コウモリ傘をたたみ傘立てに立てかけると、タオルで肩を拭きながらロビーを歩いた。

待合室を抜けようとした時、一人の婦人が椅子に腰掛けてこちらを見ているのに気付いた。軽く会釈をして通り過ぎようとして次郎は（おや、あの人は確か、……そうだあの時の）……うちの子に愛なこと教えんといて！と怒鳴られたことは、まだ記憶に新しかった。（よし、折伏や）

「ええ、気づけてな、それから修に、おりこうにしてる様きつう言うとってな」

「わかつてる」

次郎は、修のことで頭がいっぱいで妻のマサノの言葉にはろくに返事もせず、黒いコウモリ傘をパツと開くと、駅の方へと歩きだした。

降る雨は針のように鋭く屋根瓦をはじける雨しぶきに、芦屋の町はぼんやりと煙って見える。

電車にゆられること約一時間。ゴトゴトと揺られている内に、途中でどうやら居眠りをしてしまったらしい。ハッと目をさますと、あたりを見回した。

「こりゃいかん」

座席から立ち上がると、急いでホームへと飛び降りた。

「あぶない、あぶない、もうちょっとでまたマサノに叱られるところや」

「こんにちは」

声を掛けると貴婦人はだまって頭を少し下げた。（今日はえらい元氣ないな）と次郎は思いながら、婦人の方へと近づいて行った。

「よう降りまんア、こない濡れてしもって」

婦人は次郎を無視するように、外の景色に目をやった。（やっぱり嫌いなタイプの女や）と思ったが、考えて見ればかわいそうな人でもあった。

「失礼でっけど、ケンちゃんのお母さんでっか」

あア、太郎君の？」

「ヨシ子です」

「あ、ヨッちゃん。そりやどうも、いつも修がお世話になってる様で」

やっと話の糸口をつかむと、次郎は自分の家族のこと、修のこと、そしてここへ来るようになったいきさつを話した。

その内、婦人の方も一言、二言身の上を語り始

めた。

「そうでっか、そりゃえらい遠方の方から」

（可愛そうに、お金持ちやのにこんな境涯の人も
いるんやなア）

「ところで奥さん、信心してみる気おまへんか」

「信心？ ああ、そんなもん信じませんよ」

「どうしてでっか？」

「私も以前は、主人と一緒に色々やりましたよ、
四国八十八ヶ所から全国を又にかけて。勧めて
くれたものは全部やりました。祈祷師まで呼ん
で何万円もお布施をして……でも、うちの子は
ダメなんです。

女の子でしょ、体力もないし、リハビリについ
て行けないんですよ、もう半分あきらめてます」
婦人は力なく首を横に振りながら次郎に言った。
その後約二十分程、次郎は自分の体験を語った。
話はあまり上手ではなかったが、婦人は次第に次



郎の話に引き込まれて行った。

そして次郎は、

「そりゃ信心が間違ってたのや、日蓮正宗で
ないとダメでっせ」

と確信をもって言えた。

「仏法は師弟相對やさかい、日蓮正宗以外の師匠
は皆、悪知識でっせ」

「信心なんて何でも同じ。信心で病気が治ったら、
尼崎の町を逆立ちして歩きますわ、フフ」

オヤ！次郎は驚いた（こりゃ何ちゅうこっちゃ、
この人も何年か前のわしと同じや）

忘れもしない、三年前の座談会で次郎は住職に
向って（修の病気が治ったら芦屋中逆立ちして歩
いたる！）と捨てゼリフをはいた。

（何の因縁やろ、自分の言うた事がそのまま返っ
てくるなんて）

「奥さん、何言ってますのや、うちの修を見て解

かりまへんか。一週間前に入院して、もうだい
ぶ立てるようになってるんでっせ、退院もそう
遠くはおまへん」

それには婦人は返す言葉がなかった。

「ほんまに我が子が可愛いなら信心したらどうで
っか、子供の病氣、代われるものなら代わって
やりたい思いますやろ」

「そう言われても……」

その時、表玄関の前にタクシーが横付けされた。
ブブー、クラクションが鳴ってタイムリミット
を告げた。

「あっ、山崎さん話の途中で悪いけど……また」
と婦人は席を立った。

「あアそうでっか、えらい話し込んでしもうて」
物質的には何不自由なく、家に帰ればお抱え運
転手付きのあの婦人。（その内必ず入信させるで
いや、絶対入信させてみせる）

待合室を出た次郎は修の病室へと向った。(おとなしく昼寝でもしてるやろか。修おどろくで)

病室のドアを開けるとあたりを見回した。(おや、どこへ行ったんや)

「おじちゃん、おさむ君ならエレベーターで遊んでるよ」

とケンちゃんは言う。

「何やて、エレベーターやて、何でやろ」

次郎は病室を出るとエレベーターの方へと廊下を歩いた。(ひょっとして、まさか、そんなはずはないで)

次郎はエレベーターのボタンを押し、あれこれ考えながら待った。4、3、2、1と点灯する数字を見ていた。「チーン」音と共に扉が開いた。

「お父ちゃん、ラジオ買ってきたか」

「修、修、お前、立ってんのか、ほんまに歩けるのか」

(夢と違うやろか) 次郎はボウ然と立ち尽くした。

「上がって一杯やっていけ」

修の退院を明日に控え、次郎は義弟の飯田と、一日早い祝杯をかわしていた。

「兄貴、とうとう約束を果たす時が来ましたなあ」

「あーん、約束？」

「男やったら約束は守らなあきまへん、やって下さいヨ、逆立ち」

湯呑みに酒をつぎ足すと、飯田は次郎の目を見てニツと白い歯をむき出した。

「逆立ち？ そんなもん、どうちゅうことあらへん」

「さすが兄貴、そうこなあかんワ」

と、飯田は次郎をはやし立てた。

「けどな、今さらそんな事しても、何の意味もないで」

「いいや、皆んなは兄貴の逆立ち見たがってまっ

せ。秋山先生かて、今日か明日かと心待ちにしてまっせ、きつと」

「あほ、先生はなあ、そんなこと望んでへんわい。

俺は先生の気持ちには、よく解ってんのや、それが師弟相対と言うもんや」

「ほう、どんなふうにだす？」

「それはな、俺は班長やぞー折伏や！オレはこの約束、折伏をもって逆立ちにかえるんや」

飯田は口に持って行こうとした湯呑み酒の手を止め、ポカンと次郎を見ていた。

「けど兄貴、そりゃちょっと筋が違うように思いまっけどなあ」

と飯田は小首をかしげた。

「いいや、筋はちょっとたりとも違(う)とらへん」

「何でですか？」

「それはな、師匠の心を自分の心に置いて信心する、これが日蓮正宗の血脈ちゃうんやで」

「ほう、そうでっか」

「そうなんや、そやさかい折伏なんや、飯田」

次郎は飯田ににじり寄ると、

「先ずお前からや」

と飯田の目をじっと見据えた。

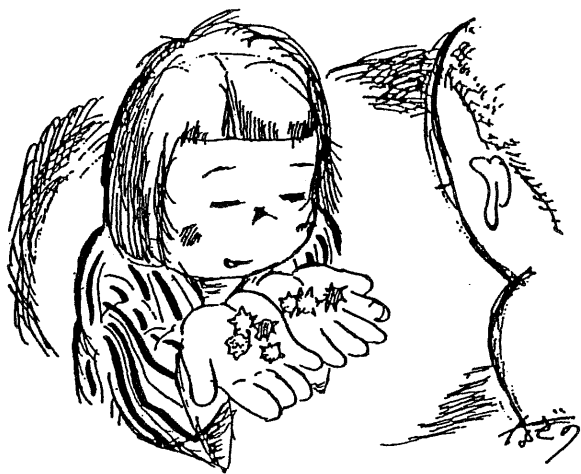
「おッ、俺がか、…」

「そうや、お前や、絶対いやとは言わせん！それと次は林や！あの林もこの頃秋山先生に大分心が動いてるみたいや」

「そんな無茶やで…」

結局飯田は、次郎に押し切られたのだが、本心はやはり次郎と同じ修の病氣平癒に動かされた中の一人だった。

数日後、飯田は御授戒を受け御本尊様をいただいた。その後の二人は同僚の林を入信させた。



「これ…あげる」

ヨッちゃんが両手を差し出した。

「何やあ？」

修は、ヨッちゃんの手のひらをのぞき込むと、そこには赤、白、黄、緑のコンペイトウがのついていた。

「おおきに」

修はそれを、自分の手のひらに一つつつ並べると「わーきれいやなあ、食べてまうのがもったいないで」

と溜め息をもらした。

「お星さまみたいでしょ」

ヨッちゃんは修の目を見つめ、ホッペにキュッと小さなエクボを作った。

「僕は、何も持ってへんから、あげれるもん何もあらへん、かんにんな」

「あたし、…何もいらん、何も。ただ……」

「ただ、何やあ」

「ただ、早ようおさむ君みたいに家へ帰りたい」と、ヨシ子はうつむいた。うっと胸がつまり、最後はもう言葉にならなかった。ホッペから流れ落ちる涙の粒が膝元の枕カバーを一つ、また一つとにじませていった。修はちょっと悲しかった。

「僕は退院したら、みんなが早よう歩けますようにって、お題目あげて祈ったるでー」

「お題目…南無妙法蓮華經いうんは一体何やるなあ……」

とケンちゃんが天井を見上げた。

「それは、それはやな、富士山の太石寺にある、戒壇の大御本尊様のことやて、秋山先生が言うてはったで、日蓮大聖人様の魂なんや、大聖人様がみんなの願いを叶えて下さるのや、そやから僕は退院できるようになったんや、家へ帰ったら来月は太御本尊様に会いに行くねん、お母

ちゃんも病気をなおしてもらたお礼に、行かん

とあかん言うてはるんや」

と修は目を大きく輝かせた。

「修、修、行くで！」

廊下の方から次郎の呼ぶ声がする。

「あつ、もう行かなあかんわ」

「おさむ君、元気でね」

「みんなも元気でね…頑張りや」

修は病室の入り口で立ち止まり、片手を振ってサヨナラを告げ、くるりと背を向けると一気に廊下を駆け抜けた。

院長先生を始め看護婦さん達に見送られ病院の門を出ると振り返った。遠く病室の窓からヨッちゃん、ケンちゃん達がいつまでもこっちを見ていた。

修は立ち止まると大きく手を振った。

「サイナラ！サイナラ！」

(また会えるかなあー)

……去って行く修達の様子を柱の影からじっと見ていた、あの一人の貴婦人(ヨッちゃん之母)がいたことを誰も知る者はいなかった。

修は走った。呼び止めるマサノの声を振り切って一目散に駆け出した。

秋山先生に、早く元氣になった姿を見てほしくて、いても立ってもいられず、自然に足が動き出したのだ。

修は嬉しくて嬉しくて無我夢中で走った。照りつける太陽の日差しも、額を流れる汗も、やさしく頬をなでて行く風にすべてが心地よかった。

途中、右手に小さな蓮池の前を通る。修は足を止めると、水面に映る自分の姿をそっとのぞきこんだ。そこには二本の足で仁王立ちになり、ハーハーと肩で息をしているもう一人の自分が、ささ

波に揺れてゆらゆらと映って見えた。

水面に浮かぶ白蓮華は「おめでとう」と祝福の笑みを送り、蓮の葉の上では雨ガエル達がゲロッゲロッと歓迎のファンファーレを奏でる。

お寺はもう目の前だ。

「一、二、三……」

石段を軽やかに駆け上がると、正面に本堂の入口が現われる。

(秋山先生驚くぞ)

修の心はおどった。

本堂ではその時、ちょうど御授戒の真っ最中だった。

「今身より仏身に至るまで……持ち奉るや否や」

「持ち奉るべし」

そこへ突然正面の扉が威勢よく開いた。

「先生！今帰りました！」

修は本堂の人波をかき分けて住職に走り寄った。

「先生！僕、帰って来たんですよ！歩けるようになったんですよ！」

「修、よかったな！」

目には涙が光っていた。

その日、本堂は身動きできない位、ぎっしりと埋め尽くされ、入口の扉を開放して外で立つ者も数多くいる。

昭和三十二年十二月の支部総会は盛大に行なわれた。

「もうダメです。家へ連れて帰り好きな物を食べさせて上げなさい。芦屋市民病院より死の宣告を受けた修を連れ帰り、親として泣くに泣けない日々を過ごした私です」

マサノの体験談に、人々は息をのんで聴き入った。

「修は小児マヒ、結核、胸には空洞があり、カリエス、他にも三つもの病氣にとりつかれ、正座

したままで両足はちっとも伸びません。左右にも開かず大小便のとりようもありません。

このまま見にくい姿でもよい。一日でも生きて欲しい。これが親心でしょう。

宗教に頼り霊友会や拝み屋、色々子供の為に莫大なお金を使いましたが、病氣は悪化する一方です。

この時、秋山先生に折伏を受けました……」

そして話しは続き、忘れもしない講員一人一人の信心を奮い起こさせたあの一言だ。

「修の病氣が治ったら芦屋中逆立ちして歩きますぜ」

と、ねじり鉢巻きの次郎が座談会へ乗り込んで来たのが、まだ記憶に新しかった。

「先生にあんな失礼なことを、とハラハラしていました。私も本当に歩けるだろうか、少しは……まさか、しかし、先生の確信は変わりません。



その後、先生の私達夫婦に対する指導は厳しさを増しました。

「子供が可愛くないのか！十年先を考えて見ろ、だいぶ良くなっただろう、二、三年の懸命の信心が出来んのか！」

と先生に叱られ、涙を流さんばかりの御指導に、主人も私も真剣になりました……」

苦しかったあの頃が思い出され胸を締めつける。マサノは言葉につまった。

次郎は目頭を押さえ、修は鼻水をすすった。人々はそっとハンカチを取り出し頬をぬぐう。折伏先で頭が頭に浮かんだ。

（そんな有り難いのならお宅の修君は歩ける？自分の頭の手で追ったら）行く先々でそう言われ、泣いて帰ったことを決して忘れはしない。

「本当に不思議な程、自分の信心と修の状態が同じなのに御本尊様の御力に今さらながら驚きま

した。この状態を見て、始めて主人も私も先生の確信が信じれる様になりました。

主人がやりだし、急速に修の足は伸び、小児マヒ、胸は全快、近所の人々も驚き始めました……日々確信が強くなり、勤行折伏が楽しくなりました。

そして遂に、本年八月すべての病気が全快したのです！」

本堂いっばいに拍手が沸き起こった。

その時、一斉に人々の目は修に注目された。

ヨシ子は耳元でそっとささやいた。

「おさむ君、よかったね」

「うん、ヨッチちゃんも信心できるようになってよかったね」

ヨシ子はコクリとうなづいた。

そしてあの病院で、柱の影から淋しそうに修達親子を見送った貴婦人、ヨシ子の母も、今はヨシ

子の横に坐り修とヨシ子をやさしく見守る。

（ヨシ子、母さんといっしょに幸せになろうね）

三人は揃って御本尊様に手を合わせ、お題目を唱えた。

「南無妙法蓮華経………」

（六九）